Annual Report

Original Article

過去のスポーツ体験及び現在の指導・日常生活体験が 地域スポーツ指導者のハラスメント行動に与える影響

悦子(東京未来大学こども心理学部) 藤後

恵(東京未来大学こども心理学部) 大橋

井梅 由美子 (東京未来大学こども心理学部)

近年、小学生のスポーツは大変盛んであり、その中でも地域スポーツを支えているのは多くのボランティアの指 導者達である。本研究は、小学生の地域スポーツのボランティア指導者に焦点を当て、指導者の過去のスポーツ 体験や現在の指導・日常体験が指導者のハラスメント行動に与える影響を明らかにすることを目的とした。地域ス ポーツを指導している255名 (男性234名、女性21名) を対象にオンライン調査を実施し、チームの競技レベル、自 身の競技レベル、実子の所属、指導者のハラスメント行動、指導者としての困難と喜び、過去のスポーツ体験、仕事 満足と家庭満足、ストレス反応を取り上げた。指導者のハラスメント行動を目的変数、残りを説明変数として順序 ロジスティック回帰分析を行った結果、過去の仲間とのネガティブな経験が強いほど、身体的体罰が強かった。ま た、過去の指導者とのネガティブな経験が強いほど、現在のストレス反応が強いほど、子どもの楽しむ生き生きした 姿が弱いほど、指導者として上手くやれたことが強いほど、指導者ハラスメントが強かった。

キーワード:指導者ハラスメント、過去のスポーツ体験、現在のストレス反応

問題と目的

近年、日本のスポーツ政策は、スポーツ庁の立ち上 げを皮切りに矢継ぎ早に展開されている。2018年11 月には日本ユニセフ協会が「子どもの権利とスポーツ の原則」を発表し、勝利至上主義ではなく子どもの 視点に立ったスポーツ環境の充実を提唱している。 日本の子どもたちのスポーツの受け皿としては、学校 の部活動が大きいが、部活動は主に中学校から開始 されるため、小学生のスポーツは地域スポーツが中 心となる。地域スポーツとは、学校外のスポーツであ り、その内容は大きく分けて3つに分類される。第1 に総合型地域スポーツクラブ(山口, 2006)、第2に 民間営利団体が運営する地域スポーツ、そして第3 に小学校の校庭や体育館で活動しているボランティ ア主体の地域スポーツである(大橋・藤後・井梅、 2018) 。

約15000人を対象としたBenesse 教育研究開発セ ンター(2009)の調査によると小学生の中学年では 男女平均7割以上がスポーツ系の習い事を行ってお り、種目は水泳、サッカー、体操、テニス、野球などが 主となっている。水泳や体操やテニスなどの個人ス ポーツは主に民間の営利団体運営の地域スポーツ、 サッカー、野球、バスケットボール(以下、バスケ)や バレーボール (以下、バレー) などのチームスポーツ はボランティア主体の地域スポーツが主に担ってい ることが多い。

これら幼少期や学童期のスポーツ体験は、生涯 スポーツの入り口となる重要なものであり、今後のス ポーツ継続への意思とも深く関連する(小泉・田原・ 岩井・真鍋、2010)。 すなわち学童期時代のスポーツ の躓き体験が、スポーツ嫌いにつながったり、スポー ツでの達成感がスポーツへの肯定的意識や自己有 能感の形成につながるのである(永井, 2004)。

それでは、子どもたちのスポーツ体験の質には、ど のような要因が関連するだろうか。先行研究による と、指導者要因、親要因、そして仲間要因が指摘され ている (Smoll & Smith,2002)。指導者要因として は、練習内容などのコーチングとともに子ども達への 言葉かけや接し方が挙げられる。親要因としては、 楽しむ志向性か、勝利志向性かなどスポーツへの価 値観やそれに基づく子どもへの接し方が挙げられる (Smoll & Smith, 2012)。仲間要因としては、お互 いにスポーツを楽しみながら信頼できる仲間である か、過度なライバル意識を主とした仲間関係なのか で異なってくる。この他にも、ボランティア主体の地 域スポーツの場合、送迎や試合当番などで親の関 わりが深いため (藤後・川田・井梅・大橋, 2017)、 チームの親要因も考慮する必要があろう。チーム全 体で子どもを育てようとしているのか、我が子中心主 義的なかかわりをしているのかにより、子どもたちに 与える影響は異なってくるのである。

このように子どものスポーツには指導者要因、仲間 要因、親要因など多面的な要因が関連するが、チー ムの雰囲気や方針には指導者要因が重要となる。藤 後・大橋・井梅(2018)は、指導者を起点として指 導者のハラスメント行動が直接的に部員の部内いじ めを促進し、また直接的にも間接的にも部員の神経 症的傾向を促すことを示した。また藤後・井梅・大橋 (2017)では、指導者、仲間、保護者のハラスメント 行動が親の子どもへの支配的態度を増長し、子ども ヘネガティブな影響を与えていることを明らかにし た。なお、本研究では、指導者のハラスメント行動を 「スポーツの場において、役割上の地位や競技レベ ル、人間関係、経済的状況などすべてを含むスポー ツの場における優位性を背景に、適正な範囲を超え て、精神的・身体的苦痛を与える又はスポーツ環境を 悪化させる行為をいう。なお、この中には性的な言動 による苦痛も含まれるものとする。」(藤後・大橋・井 梅,2017)と定義することとする。

ボランティア主体の指導者により担われている地 域スポーツは、その内訳をみると多くは子どもの親 (パパ指導者、ママ指導者) や、大学生や競技経験 のある地域の大人が善意に基づいて指導を引き受 けてくれている。しかし、ボランティア主体の指導者 は, 研修機会が少なく指導者自身の競技経験や被 指導経験が反映されやすい(大橋ら,2018;阿江, 2000) ことから、指導者自身が体罰やハラスメント に相当する被指導経験を有していると、ハラスメント 傾向の指導観になりやすいのではないかと考えた。 これに加えボランティアであるがゆえに、土日の試合 などは物理的な負担を感じることもあろう。一方で子 どもたちと一緒に練習したり、試合に勝ったりという 経験を通して指導者としてのやりがいを感じることも あろう。そして指導者も人間であるがゆえに、スポー ツ場面以外の仕事場面や家庭生活場面のストレスが 指導に影響を与える可能性も否めない。

以上より、本研究では地域スポーツに焦点をあて、過去の指導者のスポーツ体験、現在のストレス反応、およびスポーツ場面における困難と喜び、スポーツ場面以外の仕事や家庭生活の満足度が指導者のハラスメント行動に与える影響を明らかにすることを目的とした。

本研究の仮説は次の通りである。①指導者の過去 のスポーツ体験が指導者のハラスメント行動に影響 を与える。②スポーツ場面で直面する困難と喜び、そして現在の仕事や家庭に対する満足度が現在のストレス反応に影響し、ストレス反応は指導者のハラスメント行動を強める。これらのモデルを示したものがFiguer1である。スポーツの場におけるハラスメント防止は、スポーツ分野の喫緊の課題である。指導者がなぜハラスメント行動を行ってしまうのか、そのメカニズムが解明されることは、ハラスメント防止に向けての一助となるであろう。

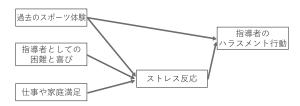


Figure1 指導者のハラスメント行動モデル

方 法

調査方法

2015年10月に調査会社楽天リサーチに委託して オンライン調査を実施した。回答欄のはじめには、自 由意志であること、データは統計的に処理し学術的 な利用のみを行うこと、回答は途中でやめてもよいこ となどについて説明を加え、同意する場合はチェック を求めた。調査参加者は、謝礼として楽天リサーチが 提供しているポイントを得ることができた。なお、本 調査で使用したデータセットは、大橋・藤後・井梅・ 川田(2016)、大橋・井梅・藤後・川田(2016)と同一 である。大橋・藤後ら(2016)では、本調査で使用し ていない指導者としての向上意欲、指導者としての自 信、指導者としての不足感、地域スポーツの問題点、 パーソナリティ特性を主に用いて分析し、地域スポー ツの指導者が直面している課題を明らかにした。ま た、大橋・井梅ら(2016)では、地域スポーツのコー チの喜びと困難な内容の尺度作成を行った。

対象者

対象者は全国の小学生を対象としたボランティア 主体の地域スポーツの指導者を過去5年以内に1年 以上務めた経験があり、指導種目が地域スポーツ の主種目である野球・バスケ・サッカー(含フットサ ル)・バレーのいずれかにあてはまる者463名(男 性419名、女性44名)であった。職業は、会社勤務 64.6%、公務員等17.7%、パート・アルバイト2.2%、学 生8.0%、自営業・自由業10.3%であった。

本研究では、現在のストレス反応も扱うため、対象 の指導者の中から現役指導者を抜き出すこととした。 現役の指導者は255名 (男性234名、女性21名) であ り、そのチームに所属する実子がある者(過去も含む) が160名(62.7%)、いない者が95名(37.3%)であっ た。年齢は、10代1名(0.4%)、20代10名(3.9%)、 30代54名(21.2%)、40代101名(39.6%)、50代73名 (28.6%)、60代16名(6.3%)であった。種目別には、 野球85名 (33.3%) バスケ・バレー71名 (27.8%)、サッ カー99名 (38.8%) であった。

調査内容

自分が指導しているチームの競技レベルと自身の 競技レベル

全国大会出場レベル、地方大会出場レベル、都道 府県大会出場レベル、地区大会上位レベル、地区大 会中位レベル、それ以下の6つの選択式から選ぶよ う求めた。全国大会出場レベル(6点)~それ以下(1 点) であった。

実子の所属

自分の子が地域スポーツに参加したために指導者 を始めるケースとそうではないケースを区別するため に設けた。「そのチームに自分の子どもが所属してい ますか」と尋ね、「はい」「昔していた」「いいえ」から 回答を求めた。この質問に対し「はい」及び「昔して いた」と回答した場合に実子の所属あり(1点)とみ なし、「いいえ」と回答した場合に実子の所属なし(0 点)とみなした。

指導者のハラスメント行動

指導者のハラスメント行動に関する項目は大学生 を対象とした先行研究(藤後・井梅・大橋, 2015)よ り、指導者のハラスメント行動で頻度が高かった5つ の項目 (Table1参照) について、「よくある」 (6点) ~ 「一度もない」(1点)の6件法にて尋ねた。

指導者としての困難

本研究で用いたデータセットから作成した指導者

の困り感尺度(大橋・井梅ら, 2016)を用いた。これ は自由回答を用いた調査(大橋・藤後ら, 2016)に基 づいて作成した項目を基に因子分析を行い5つの下 位尺度が抽出された。第1因子は「問題のある子への 対応」(6項目)、第2因子は「親の干渉・関わり」(3 項目)、第3因子は「子どもとのコミュニケーションの 問題」(3項目)、第4因子は「物理的大変さ」(2項 目)、第5因子は「試合における大変さ」(2項目)と なった。 「とてもいやだな、困ったなと感じる」 (6点) ~「いやだな、困ったなと全く感じない」(1点)の6件 法にて尋ねた。またそのような状況の経験がない場 合は、別途「経験なし」を選択するよう求めた。

指導者としての喜び

本研究で用いたデータセットから作成した指導者 の喜び尺度(大橋・井梅ら, 2016)を用いた。「指導 を行う中で、あなたが喜びややりがいを感じるのはど のような時ですか」と設問を立て、因子分析をした結 果、4因子が示された。第1因子は「指導者としての成 長」、第2因子は「子どもの楽しむ生き生きした姿」、 第3因子は「子ども達の成長」、第4因子は「指導者と して上手くやれたとき」と名付けた。

過去のスポーツ体験内容

過去のスポーツ経験を尋ねた藤後ら(2015)の研 究より、ポジティブな内容のものとネガティブな内容 のものを含めた16項目を尋ねた。具体的な項目は Table2-4に示す内容である。それぞれ、非常にあては まる(6点)から全く当てはまらない(1点)の6件法で 回答を求めた。

仕事満足と家庭満足

指導者として以外の生活全般にどのくらい満足して いるのかを測定するために、仕事満足及び家庭満足 を尋ねた。具体的には、「あなたは自分の仕事(学生 の方は学生生活) に満足していますか」 「あなたは自 分の家庭に満足していますか」と尋ね、とてもそう思 う(6点)から全くそう思わない(1点)までの6件法で 回答を求めた。

ストレス反応

心理的ストレス反応尺度(鈴木・嶋田・三浦・片 柳・右馬・坂野, 1997) の一部を用いた。心理的ス

トレス反応尺度は3因子から構成されており、第1因 子「抑うつ・不安」(悲しい気分だ、気持ちが沈んで いる、泣きたい気持ちだ)、第2因子「不機嫌・怒り」 (いらいらする、怒りを感じる、怒りっぽくなる)、第 3因子「無気力」(根気がない、話しや行動がまとま らない、いろんなことに自信がない)である。これら3 因子から各3項目、合計9項目を使用した(4件法)。

さらに、性別、年齢、種目、指導者経験年数を尋ね た。その他にもいくつか質問をしたが、本論文では報 告しないため省略する。

結 果

尺度構成

指導者のハラスメント行動尺度

指導者のハラスメント行動に関する5項目の生起 頻度を確認したところ、各項目で約40%以上が「一 度もない」と回答していた。特に身体的体罰に関する 「しかるときに、つい手や足がでること」については 「一度もない」との回答が89.41%となり、現在の地 域スポーツにおいて身体的体罰は少ない現状が明ら かになった。各項目の分布に偏りがあったため、スピ アマンの順位相関による項目間の相関関係を確認 した。その結果、「しかるときに、つい手や足が出る

こと」という身体的体罰の項目は他の項目と相関が 低かった(約.30以下)。その他の4つの項目は、各項 目間の相関が中程度以上であったため、4項目をま とめて指導者ハラスメントとし、「しかるときに、つい 手や足がでること | のみは身体的体罰とした。そこで Table1に示す通り、指導者のハラスメント行動尺度の 内容は、ひいきなどの関係性攻撃等の内容が含まれ る4項目を指導者ハラスメント、1項目を身体的体罰と わけて分析をすることとした。なお関係性攻撃とは、 仲間関係を操作することによって相手に危害を加え る行動 (Crick & Grotpeter, 1995) とされる。

過去のスポーツ体験内容

過去のスポーツ体験20項目の全項目の度数分布を 確認したところ、ネガティブな内容の項目を中心に正 規分布が見られなかった。そこで、項目内容が類似す るものをまとめ、仲間に関するネガティブな内容、指 導者に関するネガティブな内容、過去のスポーツに 関するポジティブな内容の3つのグループに分類し、 それぞれ内部相関(順位相関)を確認した。その中 で.30以下の相関係数の項目を除き再度順位相関を 確認したものがTable2~4の結果である。Table2は、 「あなたがチームメイトに話しかけても無視されたこ

とがある」「チームメイトから、あなたがやりたくない ことを強制されたことがある」などチームメイトによ

Table 1 指導者のハラスメント行動の度数分布と順位相関

				い一度も	あ っ る ぎ だ	あ 2 る ` 3	るたまに	あきさど	よくあ	スト	ピアマンの順位相関		
				な	け	П	あ	き	3	1	2	3	4
指導者ハラス	メント												
1 チームの	子が試合中にミスすると、	ため息や舌打ちをしてしまうこと	n =255 (%)	97 (38.04)	11 (4.31)	33 (12.94)	82 (32.16)	22 (8.63)	10 (3.92)	_			
	子が試合中にミスすると、 怒鳴ってしまうこと	「何やってんだ」「馬鹿」などと	n =255 (%)	136 (53.33)	11 (4.31)	23 (9.02)	66 (25.88)	12		.59 **	_		
3 子どもたけ	たを必要以上に怒鳴ってし	まうこと	n =255	115	28	42	58	7	5	.43 **	.62 **	-	
4 うまい子る	をよりかわいがってしまう	.	(%) n =255 (%)	149	16	(16.47) 31 (12.16)	47	8	4	.25 **	.33 **	.36 **	_
身体的体罰													
5 しかるとき	きに、つい手や足が出るこ	<u>ځ</u>	n =255 (%)	228 (89.41)	9 (3.53)	6 (2.35)	7 (2.75)	1 (0.39)		.13 *	.15 *	.20 **	.29 **

^{**}p < .01, *p < .05

るネガティブな内容となったため、過去の仲間ネガ ティブと命名した。6項目の内部相関は.59~.81と中 程度であった。

次に、指導者とのネガティブな内容に関する5項 目の度数分布および記述統計、順位相関の結果が Table3である。「あなたのコーチとの関係で嫌な思い をしたことがある」「あなたが失敗すると、あなたの コーチからため息や舌うちをされたことがある」など の内容であったので、過去の指導者ネガティブと命名 した。6項目の内部相関は、.59~.82と中程度であっ

た。最後に指導者および仲間との過去のスポーツの ポジティブな内容5項目の度数分布、記述統計、順位 相関の結果をTable4に示した。これらは「あなたの コーチは部員のことをよく理解してくれた」「チーム メイトたちはあなたが落ち込んでいたら励ましてくれ た」などであったため、過去のスポーツポジティブと 命名した。5項目の内部相関は、、39~.80と中程度で あった。

Table 2 過去の仲間ネガティブに関する度数分布、記述統計、順位相関の結果

		な全 いく	あて	らあ なま	やや	あて	ると て	記述	統計	スピ	アマン	の順位	:相関	
項目		あてはまら	はまらない	りあてはま	あてはまる	はまる	もあてはま	М	(SD)	1	2	3	4	5
1 あなたがチームメイトに話しかけても無視されたことがあ	n =255	135	63	30	14	7	6	1.87	(1.22)	_				
3	(%)	(52.94)	(24.71)	(11.76)	(5.49)	(2.75)	(2.35)							
2 チームメイトから、あなたがやりたくないことを強制され	n =255	121	63	28	28	8	7	2.06	(1.32)	.82 **	_			
たことがある	(%)	(47.45)	(24.71)	(10.98)	(10.98)	(3.14)	(2.75)							
3 チームメイトから、ひそひそ話をされたことがある	n =255	115	56	44	21	12	7	2.14	(1.34)	.80 **	.81 **	_		
	(%)	(45.10)	(21.96)	(17.25)	(8.24)	(4.71)	(2.75)							
4 自分が失敗すると、チームメイトからため息や舌打ちをさ	n =255	101	63	43	33	7	8	2.24	(1.33)	.63 **	.71 **	.73 **	_	
れたことがある	(%)	(39.61)	(24.71)	(16.86)	(12.94)	(2.75)	(3.14)							
5 チームメイトは、自分にわざとボールを回そうとしなかっ	n =255	129	61	35	20	5	5	1.93	(1.20)	.76 **	.75 **	.79 **	.78 **	_
たことがある	(%)	(50.59)	(23.92)	(13.73)	(7.84)	(1.96)	(1.96)							
6 チームメイトとの関係で嫌な思いをしたことがある	n =255	85	60	44	32	21	13	2.54	(1.51)	.59 **	.62 **	.74 **	.66 **	.65 **
	(%)	(33.33)	(23.53)	(17.25)	(12.55)	(8.24)	(5.10)							

^{**&}lt;sub>p</sub> < .01

Table 3 過去の指導者ネガティブに関する度数分布、記述統計、順位相関の結果

		な全 いる	あては	らあまり	ややあ	あては	るとても、	記述	於計	スピ	アマン	の順位	相関
項目		てはまら	はまらない	, あてはま	ってはまる	まる	**************************************	М	(SD)	1	2	3	4
1 あなたのコーチとの関係で嫌な思いをしたことがある	n =255	37	52	61	53	37	15	3.18	(1.44)	_			
	(%)	(14.51)	(20.39)	(23.92)	(20.78)	(14.51)	(5.88)						
2 あなたが失敗すると、あなたのコーチからため息や舌うち	n =255	52	49	56	47	31	20	3.06	(1.55)	.54 **	_		
をされたことがある	(%)	(20.39)	(19.22)	(21.96)	(18.43)	(12.16)	(7.84)						
3 あなたのコーチは、しかるときに手や足が出ることがあっ	n =255	84	39	32	44	35	21	2.88	(1.71)	.38 **	.48 **	_	
た	(%)	(32.94)	(15.29)	(12.55)	(17.25)	(13.73)	(8.24)						
4 あなたのコーチから、「ばか」「センスがない」など人格	n =255	94	50	42	32	19	18	2.55	(1.59)	.48 **	.62 **	.57 **	_
を否定するような言葉で怒られることがあった	(%)	(36.86)	(19.61)	(16.47)	(12.55)	(7.45)	(7.06)						
5 あなたのコーチから、必要以上に怒鳴られたことがある	n =255	71	64	39	38	24	19	2.75	(1.58)	.47 **	.62 **	.60 **	.80 **
	(%)	(27.84)	(25.10)	(15.29)	(14.90)	(9.41)	(7.45)						

^{**}p < .01

Table 4 過去のスポーツポジティブの内容に関する度数分布、記述統計、順位相関の結果

		い全くあて	あてはま	ないよりあ	ややあて	あてはま	とてもあ	記述統計		スピアマンの順位相関			
項目		はまらな	らない	てはまら	、はまる	3	てはまる	M	(SD)	1	2	3	4
1 あなたのコーチは部員のことをよく理解してくれていた	n =255	9	16	37	99	76	18	4.06	(1.14)	_			
	(%)	(3.53)	(6.27)	(14.51)	(38.82)	(29.80)	(7.06)						
2 あなたのコーチは、困ったことがあると部員の相談に乗ってくれていた	n =255	10	31	60	94	47	13	3.69	(1.17)	.64 **	_		
C \ 10 C 4 1C	(%)	(3.92)	(12.16)	(23.53)	(36.86)	(18.43)	(5.10)						
3 あなたのコーチは、あなたのことを気にかけてくれていた	n =255	5	23	54	93	61	19	3.94	(1.13)	.69 **	.54 **	· —	
	(%)	(1.96)	(9.02)	(21.18)	(36.47)	(23.92)	(7.45)						
4 チームメイトたちはあなたが落ち込んでいたら励ましてく	n =255	11	18	31	93	80	22	4.09	(1.20)	.39 **	.48 **	.41 **	_
れた	(%)	(4.31)	(7.06)	(12.16)	(36.47)	(31.37)	(8.63)						
5 あなたのチームメイトたちは、困ったことがあると相談に	n =255	12	12	42	99	69	21	4.04	(1.18)	.42 **	.50 **	.39 **	.80 **
乗ってくれていた	(%)	(4.71)	(4.71)	(16.47)	(38.82)	(27.06)	(8.24)						

^{**}p < .01

種目別および実子の有無による分散分析

指導者ハラスメント(4項目)、身体的体罰(1項 目)、過去のスポーツ体験(過去の仲間ネガティブ、 過去の指導者ネガティブ、過去のスポーツポジティ ブ)、ストレス反応のそれぞれを従属変数、種目(野 球、バスケ・バレー、サッカー)と実子の有無を独立 変数とした2要因の分散分析を実施した(Table 5)。 その結果、指導者ハラスメント (F(5, 249)=2.33, p<.10) と身体的体罰 (F(5, 249)=2.41, p<.10) に交

互作用の傾向が示されたが、単純主効果検定では各 群には有意な差が示されなかった。

過去のスポーツポジティブは、種目の主効果が示さ れ (F(5, 249)=2.76, p<.10)、多重比較の結果、バス ケ・バレー (p<.05)とサッカー (p<.10) が野球より 得点が高い傾向が示された。過去の仲間ネガティブ と指導者ネガティブにおいては有意な差は示されな かった。

Table 5 分散分析の結果

項目 -	野球(N=85)				・バレー =71)	サッカ	-(N=99)	主効	交互作	
·		実子あり (<i>N</i> =56)	実子なし (<i>N</i> =29)	実子あり (N=41)	実子なし (<i>N=</i> 30)	実子あり (<i>N</i> =63)	実子なし (N=36)	実子有無	種目	用
指導者ハラスメント	M	2.48	2.26	2.32	2.58	2.51	2.00	1.11	0.60	2.33^{+}
	(SD)	(0.15)	(0.21)	(0.18)	(0.21)	(0.14)	(0.19)			
身体的体罰	M	1.14	1.52	1.20	1.17	1.24	1.28	0.15	0.54	$2.41 \ ^+$
	(SD)	(0.12)	(0.16)	(0.14)	(0.16)	(0.07)	(0.09)			
過去の仲間ネガティブ	M	2.08	2.22	1.99	2.18	2.13	2.26	1.04	0.18	0.01
	(SD)	(0.15)	(0.21)	(0.18)	(0.21)	(0.14)	(0.19)			
過去の指導者ネガティブ	M	3.00	3.13	2.88	2.89	2.69	2.86	0.36	1.10	0.08
	(SD)	(0.17)	(0.24)	(0.20)	(0.23)	(0.16)	(0.21)			
過去のスポーツポジティブ	M	4.08	3.99	3.93	4.27	3.88	3.69	0.05	$2.76 \ ^{+}$	1.83
	(SD)	(0.12)	(0.17)	(0.14)	(0.17)	(0.11)	(0.15)			
ストレス反応	M	1.55	1.54	1.49	1.61	1.55	1.64	0.86	0.19	0.27
	(SD)	(0.08)	(0.11)	(0.09)	(0.11)	(0.07)	(0.10)			
*n< 10										

"p<.10

指導者の過去のスポーツ体験、現在の指導・日常生 活体験、及びデモグラフィック要因が指導者のハラ スメント行動に与える影響

指導者の過去のスポーツ体験、現在の指導・日常 生活体験、及びデモグラフィック要因が指導者のハラ スメント行動に影響を与えることを検討するために、 指導者の過去のスポーツ体験、困難や喜びの各下位 尺度、ストレス反応、仕事満足、家庭満足、そして指 導者の競技レベル、チームの競技レベル、年齢と指導 者のハラスメント行動の順位相関を確認した。その 中で指導者のハラスメント行動と一つでも有意な相 関があったものを説明変数として投入し、順序ロジス ティック回帰分析を行った。分析に際しては、生起頻 度が低かった身体的体罰は、実子の有無および種目 別に分けずに全体傾向のみを検討した。一方指導者 ハラスメントは、実子の有無別及び種目別(野球群、 バスケ・バレー群、サッカー群)に分析し、その結果を Table6に示した。

身体的体罰は、過去の仲間ネガティブが強いほど、 身体的体罰が強かった。指導者ハラスメントでは、全 体傾向としては過去の指導者ネガティブが強いほど、 現在のストレス反応が強いほど、子どもの楽しむ生き 生きした姿が弱いほど、指導者として上手くやれたこ とが強いほど指導者ハラスメントが強かった。

実子有無による違いを見てみると、実子なしの特徴 としては、過去の指導者ネガティブが強いほど、指導 者ハラスメントが強く、実子ありの特徴としては、試合 における大変さが弱いほど、指導者として上手にやれ たと思うほど、指導者ハラスメントが強かった。両者 に共通するものは、現在のストレス反応と子どもの楽 しむ生き生きした姿であり、現在のストレス反応が強 いほど、子どもの楽しむ生き生きした姿が弱いほど、 指導者ハラスメントが強かった。

種目別の特徴としては、野球ではほぼ影響が示さ れず、バスケ・バレーは現在のストレス反応が強いほ ど、そしてサッカーでは現在のストレス反応が強いほ ど、試合における大変さと物理的大変さと子どもの楽 しむ生き生きした姿が弱いほど、、指導者ハラスメン ト反応が強かった。

Table 6 指導者のハラスメント行動を目的変数とした順序ロジスティック回帰分析(実子の有無、種目別)

	身体	的体罰				指	尊者ハラ	ラスメント				
変数名		全体 V=255)	全体 (<i>N</i> =255	⁵⁾ (Л	実子 あり (=160)	7	実子 なし /=95)	野球 (<i>N</i> =85)	バ	スケ・ シレー /=71)		ッカー √=99)
	β	オッズ比	β オッフ	洋比 β	オッズは	΄ β	オッズ比	β オッズト	Łβ	オッズ比	β	オッズ比
過去の仲間ネガティブ	.30	1.76 *	.07 1.12	.1′	7 1.36	05	0.92	.07 1.15	.18	1.48	.08	1.15
過去の指導者ネガティブ	.15	1.29	.15 1.26	* .1	1.19	.23	1.46 *	.10 1.19	.10	1.19	.18	1.36
過去のスポーツポジティブ	.26	1.84 +	.03 1.08	.13	3 1.38	12	0.77	09 0.82	.13	1.44	.09	1.23
現在のストレス反応	.16	1.78	.27 2.53	** .19	2.06 *	* .34	3.19 **	.20 2.25 +	.18	2.03 *	.31	2.97 *
問題のある子への対応	04	1.00	07 1.00	09	1.00	.04	1.00	17 1.00	33	1.00	.05	1.00
親の干渉・関わり	.22	1.00 +	.06 1.00	.10	1.00	.01	1.00	11 1.00	.05	1.00	.16	1.00 +
物理的大変さ	13	1.00	08 1.00	0	1.00	13	1.00	.24 1.00 +	.08	1.00	25	1.00 **
試合における大変さ	15	1.00	12 1.00	+1′	7 1.00 *	06	1.00	09 1.00	13	1.00	19	1.00 *
子どもの楽しむ生き生きした姿	10	0.72	18 0.56	**18	3 0.53 *	25	0.47 *	13 0.69	15	0.55	22	0.45 *
コーチとして上手くやれたとき	05	0.89	.13 1.34	* .20	1.58 *	*01	0.99	.03 1.09	.15	1.43	.12	1.34
仕事満足	.01	1.02	05 0.93	00	6 0.91	.00	1.00	07 0.89	.19	1.48 +	14	0.79
家庭満足	05	0.92	.07 1.13	02	2 0.97	.19	1.42	03 0.95	03	0.94	.11	1.23
R^2	.27	.27 *	.19 .19	** .23	3 .23 *	* .27	.27 **	.22 .22 +	.36	.36 **	.31	.31 **

 $^{^{+}}p < .10, ^{*}p < .05, ^{**}p < .01$

Table 7	ストレス反応へ	の重回帰分析	(全休	宝子の有無	種目別)

	全体	実子あり	実子なし	野球	バスケ・ バレー	サッカー
変数名	(N=255)	(N=160)	(N=95)	(N=85)	(N=71)	(N=99)
_	В	В	В	В	В	В
過去の仲間ネガティブ	.18 *	.24 **	.06	.04	.18	.17
過去の指導者ネガティブ	.05	03	.15	.01	06	.28 *
過去のスポーツポジティブ	.05	03	.09	07	.04	.15
問題のある子への対応	.01	.05	04	.14	15	05
親の干渉・関わり	08	.04	23 **	·23 ⁺	13	.06
物理的大変さ	.07	.00	.08	.06	.15	.09
試合における大変さ	.06	.02	.19 **	02	.10	.20 **
子どもの楽しむ生き生きした	01	.02	09	20 ⁺	.02	.14
コーチとして上手くやれたと	.07	.04	.18 +	.05	.06	.01
仕事満足	23 **	31 **	09	22 *	02	30 **
家庭満足	06	09	.00	07	24 *	01
R^2	.13 **	.21 **	.14	.18	.14	.28 **

p < .10, p < .05, p < .01

次に身体的体罰を除く指導者ハラスメントには、 すべての分析においてストレス反応が有意に影響し た。そこで、指導者ハラスメントに強く関連するストレ ス反応には、どのような要因があるのかを明らかにす るために、ストレス反応を目的変数、スポーツを通し た日々の困難と喜び、そしてスポーツ以外の仕事や家 庭での満足度を説明変数として重回帰分析を実施し た。

その結果、Table7に示す通り、過去の経験に関して は、全体および実子ありの群では、過去の仲間ネガ ティブが強いほどストレス反応が強く、サッカーでは 過去の指導者ネガティブが強いほど、ストレス反応が 強かった。スポーツ指導場面に関しては、親の干渉が 多いほど、実子なし群と野球群では、ストレス反応が 弱かった。一方、実子なしとサッカーでは、試合にお ける大変さが強いほど、ストレス反応が強かった。ス トレス反応には、スポーツの指導場面以外の影響が 大きく、全体、実子あり、野球、サッカーにおいては、 仕事満足が弱いほどストレス反応が強く、バスケ・バ レーでは、家庭満足が弱いほど、ストレス反応が強 かった。

考察

指導者のハラスメント行動の実態欲

本研究では、地域スポーツに焦点をあて、過去の指 導者のスポーツ体験、現在のストレス反応、およびス ポーツ場面における困難と喜び、スポーツ場面以外の 仕事や家庭の満足度が指導者のハラスメント行動を どのように規定するかを検討した。

はじめに指導者のハラスメント行動の現状である が、言語的な攻撃やひいきなどの関係性攻撃は約5 割、身体的体罰は約9割が「一度も経験したことがな い」と回答している。身体的体罰への自制は、近年の 体罰防止運動の影響もありかなり浸透してきている といえるであろう。一方で1割は身体的体罰の経験が 「あり」と回答しており、10人に1人の指導者がまだ 暴力によって小学生の子どもをコントロールしようとし ている実態が示された。また他の項目を見てみると、 「チームの子が試合中にミスをすると、ため息や舌打 ちをしてしまうこと」が「たまにある」と回答した指導 者が32.16%、同様に「何やってんだ」「馬鹿」などと その場で怒鳴ってしまうことも25.88%が「たまにあ る」とし、「うまい子をよりかわいがってしまうこと」は 18.43%が「たまにある」と回答している。すなわち、

身体的体罰は減りつつあるが、3分の1の指導者は、子 どもがミスをしたらため息や舌打ちなどの非言語的 攻撃、そして怒鳴るなどの言語的攻撃、そしてうまい 子をひいきするという関係性攻撃を行っているのであ る。これらの実態は、阿江 (2014) の先行研究や島沢 (2017) のインタビュー取材からも妥当な現状であろ う。

大学生を対象とした藤後ら(2015)の回想法によ る研究結果では、指導者との関係でネガティブな経験 として挙がった上位3つは、「失敗すると必要以上に 怒鳴られた」「ためいきや舌打ちをされた」「『ばか』 など人格を否定するような言葉で怒鳴られた」であっ た。これらはまさに今回指導者たちが回答した内容 とほぼ一致する。そして重要な点は、藤後ら(2015) の研究によると、これらの指導者によるネガティブな 体験が大学生のスポーツ観の「切り捨て」に有意に 影響していたという点である。「切り捨て」の内容は、 「チームについていけない人は、チームを辞めたらい いと思う」「下手な人は、チームの足を引っ張っている と思う」というものであった。つまり指導者が選手に 対してハラスメント行動を行うことは、他者を切り捨 ててよいという関係性攻撃を肯定するような世代間 連鎖につながる可能性があり、留意すべきである。

続いて、指導者のハラスメント行動、過去のスポー ツ体験、現在のストレス反応に、実子の有無や種目に より違いがあるのかを確認した。その結果、興味深い ことに過去のスポーツ体験や現在のストレス反応に は、得点差は示されなかった。指導者のハラスメント 行動には種目別、実子有無別の有意な差の傾向は示 されたが、単純主効果では差がみられなかった。よっ て、大まかな傾向のみであるが、実子なしでは、バス ケ・バレーの体育館競技での指導者ハラスメントが 高く、さらに実子なしがありより指導者ハラスメントが 高かった。すなわちバスケ・バレーの体育館競技で、 言語的攻撃や関係性攻撃を含むハラスメントが発生 しやすく、パパ・ママ指導者よりも外部指導者にそれ が顕著であった。特にこれらの体育館競技では、指 導者と選手の物理的な距離が近いため、指導者のた め息や罵声は選手にも聞こえてしまい、選手は常に 指導者の顔色をうかがう委縮したプレーになりかね ない。それだけではなく、指導者の不適切な態度は、 選手同士の人間関係、応援席の雰囲気にも影響を及 ぼすのかもしれない。 藤後ら (2018) は、指導者のハ

ラスメント行動が部内いじめを引き起こし、最終的に は選手の神経症的症状に影響を及ぼすことを実証し た。これらのことからも、指導者には言語的攻撃や関 係性攻撃に関する実効性ある研修制度や罰則制度が 求められる。

最後に身体的体罰に関してだが、度数分布の結果 から、ほぼ9割が体罰をしていないと答えているが、 他の競技に比べ野球の実子なしに身体的体罰が多く 認められた。実子なしで指導をするということは、過 去において野球の競技経験者であり、現在も野球へ の情熱が高い人物であると考えられる。従来ボラン ティア主体の地域スポーツの代表としては、スポーツ 少年団が挙げられ、その中でも野球の歴史は古い。 彼らは、体罰や根性論の時代を過ごし、甲子園球児 になることを目標とし、練習に励んできた年代であ る。その時代の指導観を身に着け、自身が修得した 指導観を修正することもなく、競技経験を基に身体 的体罰を実施している実態は大きな問題であり(近 藤, 2014)、改善に向けての喫緊の対応が必要であろ う。

指導者のハラスメント行動を規定する要因

指導者のハラスメント行動を規定する要因としての 過去のスポーツ体験であるが、身体的体罰には過去 の仲間ネガティブ、そして指導者ハラスメントには過 去の指導者ネガティブが関連していた。そして、特記 すべきことは言語的攻撃性や関係性攻撃が中心であ る指導者ハラスメントには、現在のストレス反応が重 要な規定因となっているのである。現在のストレス反 応には、過去の仲間ネガティブや過去の指導者ネガ ティブ、指導場面の親の干渉・関わり、試合における 大変さ、日常場面の仕事満足と家庭満足が影響して いた。すなわち、過去にネガティブな経験をしている ほど、ストレス反応を感じやすくなっており、かつ日常 的な仕事や家族が充実していないとストレス反応を 感じやすかった。そして、ストレス反応は、指導者のハ ラスメント行動に影響を与えていた。

過去のスポーツ体験の仲間ネガティブが身体的体 罰を促し、過去の指導者ネガティブが指導者ハラスメ ントを促すという結果は、今目の前にいる子どもたち がチーム内の対人関係でネガティブな体験が多いと、 それが将来指導者になった際にハラスメントを誘発 する可能性を示唆したものであった。過去のスポーツ ポジティブは指導者のハラスメント行動を抑制していないことを鑑みると、まずはチーム内で仲間や指導者とのネガティブな関係を生起させないような工夫が必要であろう。一方で、指導者のストレス反応を減らすよう保護者が上手に指導者をサポートできる関係性が構築できることを期待したい。

生涯スポーツの入り口となるべき学童期の子どもた ちにとって、スポーツの指導者は影響力を与える重要 な人物である。多くの指導者はボランティアコーチで あり、地域の住民が担ってくれている。地域住民と子 ども達との出会いはコミュニティ形成という視点から も大切である (永井, 2010)。一方で、ボランティアだ からこそ、不適切な対応をしていたとしても「休日返上 で指導してくれているのだから(指導してやっている のだから)」「指導者を批判するとレギュラーになれ ないかも」などと様々な思惑が働き、周囲の大人が指 導者のハラスメント行動を容認してしまうことになり かねない。そして残念なことに、本研究の分析結果よ り、指導者として成長や喜びを感じるほど、上手くや れたと思うほど、現在のストレスが強いほど、指導者 ハラスメントが強くなる傾向が見られた。特に試合に 勝つなどと結果を出している指導者にとって、指導方 法を振り返ることは難しく、より強い啓蒙活動や指導 者への直接的介入、同時に指導者の負担を減らすよ うなサポート体制が必要となってくるのである。

よりよいスポーツ指導に向けて

指導者のハラスメント行動を予防するためには、 指導者の自己理解を促すことが急務であろう。自己 のスポーツ体験や日常的なストレス反応がどのように 現在の指導法に影響しているのかを理解してもらう 必要がある。特に結果を出している指導者は、自己満 足に陥りやすく、他者から口を挟まれることに不快感 を表す指導者も多い(永井, 2004)。 ボランティア主 体の地域スポーツが発展していくためには、指導者 自身の研修や指導者育成システムが急務であろう。 国外に目を向けるとアメリカのカリフォルニア地方の 地域スポーツは、ボランティア主体でありながらも運 営の統括はクラブチームが行っている。そこでは、親 の指導者への疑問があれば、クラブチームに連絡が でき、クラブチームからもプロの指導者が随時ボラ ンティア主体のチームに出向いて指導を行ったり、 指導者や親の相談にのったりしている(大橋・藤後,

2017; Thompson, 2003)。日本の地域スポーツもこのような仕組みづくりが必要なのではないだろうか。

最後によりよいスポーツ環境に向けてのキーワードとしては、今回指導者ハラスメントの抑制要因となった「子どもの生き生きした姿」であろう。子どもの生き生きした姿を目の当たりにすることで、指導者ハラスメントは弱まっている。そこで、子どもの生き生きした姿を引き出している指導者の指導法を学んだり、自身のチームで子どもの生き生きした姿を指導者が引き出したときに、それを周囲の大人が喜び、感謝として伝えることで、指導者の指導力が高まるかもしれない。

今後の課題

本研究の課題としては、対象者が過去5年間の地域スポーツ経験者も含めてサンプリングしていたが、現在のストレス反応の影響を検討するために、現役指導者のみに絞ったところ、サンプル数が少なくなった。今後はさらなる対象者の拡大を期待したい。また本研究はチームスポーツのみを対象とした。個人スポーツにおいても指導者ハラスメントは報告されている現状から、個人スポーツも含めた検討が今後は望まれるであろう。

引用文献

- 阿江美恵子 (2000). 運動部指導者の暴力的行動の影響: 社 会的影響過程の視点から 体育学研究,45(1), 89-103.
- 阿江美恵子 (2014). 運動部活動における体罰が子どもに及ぼ す影響 体育科教育学研究, 30(1),63-67.
- Benesse 教育研究開発センター (2009). 「第1回 学校外教育 活動に関する調査報告書」http://berd.benesse.jp/ berd/center/open/report/kyoikuhi/webreport/ report06_05.html#zu6_7 (2018年10月16日)
- Crick, N. R. & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. Child Development, 66, 710-722.
- 小泉佳右・田原亮二・岩井幸博・真鍋求 (2010) 学童期の運 動習慣が青年期の身体活動量に与える影響 植草学 園大学研究紀要, 2, 41-47.
- 近藤良享(2014). なぜ部活動の体罰・暴力が表面化しない のかースポーツと体罰に関する調査を手掛かりに一 冨永良喜・森田啓之編著「いじめ」と「体罰」その 現状と対応 (pp.142-156) 金子書房
- 永井洋一(2004). スポーツは「良い子」を育てるか NHK出
- 永井洋一(2010). 賢いスポーツ少年を育てる 大修館書店 日本ユニセフ協会 (2018). 子どもの権利とスポーツの原則 日本ユニセフ協会
- 大橋恵・井梅由美子・藤後悦子・川田裕次(2016). 地域ス ポーツの指導者のやりがいと困難の内容: 尺度の作 成を目指して 未来の保育と教育:東京未来大学実 習サポートセンター紀要, 3, 19-28.
- 大橋恵・藤後悦子(2017).アメリカカリフォルニア北部におけ る地域スポーツの実情 東京未来大学研究紀要, 12, 123-132.
- 大橋恵・藤後悦子・井梅由美子(2018). ジュニアスポーツ コーチに知っておいてほしいこと 勁草書房
- 大橋恵・藤後悦子・井梅由美子・川田裕次郎(2016). 地域ス ポーツの指導者が直面している課題:指導者の指 導力向上に向けて スポーツ産業学研究, 26(2), 243-254.
- 島沢優子(2017). 部活があぶない 講談社現代新書
- Smoll,F.L.& Smith,R.E.(2002). Children and Youth in Sport. Kendal/Hunt Publishing
- Smoll,F.L.&Smith,R.E.(2012). Parenting Young Athletes. Rowman & Littlefield.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野 雄二(1997). 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研 究, 4(1), 22-29.
- Thompson, J. (2003). The Double-Goal Coach: Positive Coaching Tools for Honoring the Game and

- Developing Winners in Sports and Life, Harperresource Book.
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵(2015). スポーツにおける ポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラス メント容認志向 東京未来大学研究紀要, 8, 93-103.
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵(2017). チームのネガティブ な人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与 える影響 モチベーション研究, 6, 17-28.
- 藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋恵(2017). 小学 生の地域スポーツにかかわる親のスポーツ・ペアレ ンティング コミュニティ心理学研究, 21(1), 80-95.
- 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子(2017)子どものスポーツにお けるスポーツ・ハラスメントとは 東京未来大学研 究紀要, 12, 63-73.
- 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子(2018). 中学校の運動部指 導者の関わりが部内の人間関係および生徒の精神 的状態に与える影響 社会と調査, 20, 55-66.
- 山口泰雄(2006). 地域を変えた総合型地域スポーツクラブ 大修館書店

Effects of past sports experiences, as well as current coaching and daily life experiences, on harassment behaviors conducted by community sports coaches

Etsko TOGO (Tokyo Future University) Megumi, M.OHASHI (*Tokyo Future University*) Yumiko IUME (*Tokyo Future University*)

More and more elementary school students are playing sports in recent years and they are being supported by many volunteer coaches. This study investigated the effects of past sports experiences, as well as current coaching, and daily life experiences on harassment behaviors of community sports coaches. An online survey was conducted with community sports coaches (N=255, 234 men and 21 women) that inquired about the following issues; the performance of the team, performance of the coach, affiliation of their children, harassment behaviors of coaches, difficulties and pleasure in coaching, past sports experiences, job satisfaction, family happiness, and stress responses. Ordered logistic regression analysis was conducted with coaches' harassment behavior as an objective variable and other factors as explanatory variables. The results indicated that coaches with more negative past experience tended to administer stronger corporal punishment. Moreover, coaches with more negative past experiences with coaches tended to harass more. Also, coaches with more current stress responses harassed more. Furthermore, coaches tended to harass more when children seemingly did not enjoy playing sports, and if they had more successful experiences as coaches.

Key Words: harassment of coaches, past sports experiences, current stress responses

-- 2018.11.9 受稿, 2019.1.29 受理--